

## 「plus α」 ～台北事務所のご紹介～

CM&EO 事業部 田村 一雄

前号のコラムでも紹介した通り、2007年に台北事務所を開設した。これ以前の台湾での取材は、日本在住の台湾人留学生にスポット的にお手伝い（アポ取り、アテンド、通訳）をお願いしていた。ご当人は我々のために力をつくしてくれたが、やはり留学生であることで毎回というわけにもいかず、その都度人を探さなければならない状況であった。このため、台湾での活動拠点をつくりたいという希望を会社に申し出た。それが通って台北事務所を設立することにしたのである。

台北事務所といってもオフィスはない。Chouさんという女性スタッフが自宅を事務所代わりにして活動している。人員体制も一人である。Chouさんは高校卒業後、日本の大学に留学し卒業、台湾に帰ったあと複数の日系企業で秘書などを務め、その後矢野経済に入社した。Chouさんは日本での学生時代、最初は日本語もわからず引っ込み思案な数年を過ごしたが、ある大きな事故に見舞われしばらく入院せざるをえなくなった。そして退院後、人が変わったように社交的になったという。

Chouさんは美しいだけでなく非常におもしろい人である。学生時代におつきあいしていた日本人のモトカレが久しぶりに電話してきた。\*そのカレが「僕のどこが好きになったの」と問うた。Chouさんは「日本語がうまいから」と答えたらしい。\*また、結婚は占いで決めたという。台湾人らしい大らかさではないか。

Chouさんは日本語が非常にうまい。日本人並みといっても過言ではない。前総統である陳水扁氏が来日するときの通訳のオーディションで最後の2人に残ったという（陳水扁氏の来日はかなわなかった）。

Chouさんもこれ以前に我々のお手伝いをしてくれたスタッフもほとんどが女性であった。このため、夜のアテンドはお願いできなかった。私の台湾の夜は夜市の見学とか屋台をひやかす程度の健全なものだったのである。

ところが私に台湾の楽しい夜の過ごし方を教えてくれた人が現れた。その人は我々の取材先でもあり、台湾にはもう 10 年以上通っている。たまたま同氏と私の台湾出張が重なったため、食事等をご一緒させていただいた後、日本のビジネスマンの間で有名な林森北路（リンセンペイルー）に連れて行ってもらったのである。

林森北路には日本語ができるおねいさんのいる店が 200 件程度あるという説もある。日本人ビジネスマンが中国語を習うという口実でお店に通うことから「五本木大学」と呼ばれることもある。

林森北路における私の歴史はまだ浅く、知っている店も片手の指で数えられる程度だ。したがってあまり多くのことを語る資格はない。ただ、林森北路の上級者に言わせると、この境界の一時期の盛り上がりは影を潜めたらしい。おねいさんの年齢層もやや上がってきているといわれる。多くの日本人技術者などが半導体、液晶、台湾新幹線などのプロジェクトで訪れていたが、プロジェクトの終了などで少なくなったためだという。とはいえ、ある店ではカウンターテーブルの上でほぼ全裸状態で歌い踊る、我々の分野にも関係の深い●●産業の元気な日本人ビジネスマンを見かけたりもした。

ある日、林森北路のお店のおねいさんに食事を誘われた（いわゆる同伴ですね）。有名な鶏料理の店があり、特にそこの黒い鶏が最高においしいという。断る理由もないので誘われるままについて行った。結論を言えば黒い鶏は私の口には合わなかった。

しかし、台湾（ほとんど台北しか知らないが）には細分化された各種の中国系料理がある。北京、四川、広東料理や飲茶は言うに及ばず、客家、雲南料理などもおいしい。私が愛してやまない部下の S 君は客家料理ででてきたしじみの醤油漬けのような料理を貝塚になるくらい食べた。紹興酒には細く刻んだショウガを入れて飲む。その方が二日酔いになりにくい（ような気がするが、たくさん飲めば同じです）。屋台に毛の生えたような店で食べるひき肉を乗せたご飯やトマトラーメンも安くおいしい。

私が始めて台湾を訪れたのは1997年頃だったかと思うが、その頃、街でみかける台湾女性はあまり美しいようには思えなかった。暑いので化粧はほとんどしないためでもあるらしい。しかし、ここ数年は多くの女性がチャーミングに見える。化粧品品の品質が向上したのか、私が年をとったせいかな。

話が思わぬ方向に展開してしまった。台北事務所の話に戻すが、同事務所は調査や営業機能はまだ持っていない。あくまでも我々日本人スタッフの現地調査におけるフォローと簡単な情報収集等である。できるだけ早期に同事務所を台湾における本格的な拠点にしたいと考えている。

※～※こんなことを聞く方も聞く方でバカらしい話である。あまりにバカらしいのでChouさんはこう答えざるをえなかったのかもしれない。しかし、Chouさんは本気で「日本語のうまさ」を評価していたフシもある。[筆者コメント]

注) なお、個人情報に関わる文章も出てきますが、本人には掲載の許可をいただいております。

執筆者略歴：田村一雄

1989年、(株)矢野経済研究所に入社。以来、化学・素材分野の調査研究に従事し、現在はデバイス領域まで調査領域を拡げ、CM&EO事業部の事業部長としてエレクトロニクス分野の川上から川下領域を統括。知的クラスターへのコンサルティング実績を有するほか、台北事務所所長、ソウル支社長を兼務。